

序

『ジョジョの奇妙な冒険』（以下、『ジョジョ』と略記）というマンガから、この人生をよりよく生きるための思想（倫理）を学び直すこと。

それがこの本のテーマである。

*

まず、いくつかの個人的な思い出を語ることをゆるしていただきたい。

私をはじめて荒木飛呂彦氏のマンガと出会ったのは、一〇歳の頃だった。『週刊少年ジャンプ』（以下、『ジャンプ』と略記）に連載された『バオー来訪者』（二九八四〜一九八五年）を読んだ時の鮮烈な感動は、今も記憶に残っている。

『バオー来訪者』の物語は、生きることの悲しみに満ちているように思えた。

主人公の育郎少年は、謎の組織ドレスに両親を殺され、彼自身が生物兵器バオーの実験体にされてしま

う。超能力をもつ少女スマイレに助けられるが、その後もドレスに追われる逃亡者の身となる。残酷で孤独な運命である。けれども育郎少年は、現実がどんなに過酷で理不尽でも、どこか高貴であり、他人に対する優しさを見失わない。

——自分もまた彼のように、強く、優しく、高貴な人間であれたら。

子ども心に、そんなことを思った気がする。

何より、当時の私は、次のことに魅了されたのだった。

寄生虫を埋め込まれた育郎は、体液が特殊なものになり、皮膚や肉体が病気のようになり、異形の怪物になっていく。しかし、その体液の異常のおかげで、彼は素手で金属を溶かしたり、皮膚を硬化させたりして、組織の追っ手たちと戦うことができる。寄りそってくれるスマイレや、行きずりの親切な老夫婦を助けることもできる。

つまり、病気やハンディであるはずの身体の異常（異形）こそが、育郎の超人的な強さの秘密になっているのだ。だからこそ、あの頃の自分は、マンガの中の育郎に——まさに生々しい皮膚感覚によって——強く共鳴し、感情移入したのだろう。というのも、少年時代の私は、ひどいアトピー性皮膚炎に苦しんでいたからだ。

体中の皮膚が乾燥し、ぼろぼろになった。夜中に全身をかきむしって、朝、血だらけで目覚めることもあった。同級生から「変な病気じゃねえの」「うつるんじゃない?」「ゾンビみたい」と笑われたり、からかわれたりもした。悲しかった。この世は残酷だと感じた。育郎青年の孤独な悲しみが他人事には思えなかった。どんな悲しみの底ですら、あんなふうに高貴な人間であれたら、と。

強さと弱さ。

長所と短所。

美しさと醜さ。

それら是对立するのではなく、この私の身体において分ちがちがたく混ざりあっている。いや、そればかりか、宿命としての弱さや病の中にこそ、この私の真実の〈強さ〉があり、かけがえのない〈美しさ〉があるのかもしれない。

もちろん当時の私が、そうしたことをはっきりと、頭で理解していたわけではない。記憶の美化や補正もあるだろう。けれども、当時の私が『バオー来訪者』に深く強く魅了されたのは、まだまだ未熟な無意識の本能であれ、驚くべき未知の世界観をこの作品に感じ取っていたからではないか。

*

私はその後、『ジョジョ』を連載の第一回目（『ジャンプ』一九八七年一・二号）からリアルタイムで読み続けることになった。今から思えば、『バオー来訪者』はその後の『ジョジョ』の心臓となるような思想（倫理）を、未成熟な形ではあれ、すでに先取りするものだった。

あれから三〇年。

『ジョジョ』という作品の魂は、この私の心身に食い込んで、骨や肉となって、血液として循環し続けている。大げさな言い方だとは思わない。そういうマンガに出会えたのは、幸運で幸福なことだった。『ジョジョ』の心臓として脈打つ奇妙な思想、それはおそらく次のようなものだろう。

——人間としての宿命的な弱点や病、狂気、無能力こそが、この私の人生にとっていちばんの強みになり、最大の潜在能力になっていくのかもしれない。

他者たちとの競争や能力主義的な戦いを基本的に肯定しながら、病・障害・狂気などにはらまれた潜在的な「力」を解き放つことによって、未曾有の喜びに満ちた新しい世界を切り拓いていくこと。マンガとしての『ジョジョ』は、そうした革命的な倫理を私たちに教えてくれたものではなかったか。

*

私個人の感じ方であれば、思想としての凄みを感じるのは第七部である。自分の人生や仕事を内省させられるのは第五部。シリーズ中、最大の問題作だと思うのは第六部。それらに対して、心からいちばん楽しんで読んでいるのは、第四部である。

第四部「ダイヤモンドは砕けない」(『ジャンプ』一九九二年二〇号〜一九九五年五一号)は、杜王町^{もりやまちょう}という架空の地方都市(モデルは宮城県仙台市)が舞台となる。

第四部のポイントは、杜王町の住人たちの奇妙な欲望のあり方が、それぞれに唯一無二のユニークさにおいて肯定され尽くしていくことだ。しかも普通の意味での善と悪、美と醜などの二元論では割り切れないものとして。

当時、地元の男子校の高校生だった私は、目立った個性がないことを気に病んだり、友達ができずうじうじと悩んだり、目標や夢もなく、将来に漠然とした不安を感じたりしていた。気弱さを隠すために「いい子」を演じていた。だからこそ、『ジョジョ』のキャラクターたちから呼びかけられているように感じた――。欲望の過剰さは、じつは、この地上を生きる誰にでも等しく与えられている。ほんとうは君もまた、君の中のユニークで奇妙な欲望を、その弱さ・病・狂気において肯定し、全力で生きて構わないのだと。

欲望は必ずしも真や善や美では語りえない。それは嘘や悪や醜に近いものかもしれないし、世間の常識やルールを逸脱していくかもしれない。すると、自らの欲望を深く強く信じぬくには、勇気がいる。

そうした『ジョジョ』の思想を私なりに理解し、言葉にできるようになったのも、もちろん、さらにずっと後のことだった。しかし、学校を出て大人になっても、日々の糧として、少年時代と変わらぬ情熱で『ジョジョ』を読み直し続けてきたのは、たんに娯楽としての面白さだけではなく、この人生をよりよく生きるための倫理を『ジョジョ』から学んできたからではなかったか。

*

もうひとつ。私は二〇代後半から障害者介助の仕事をしていた。身体や脳、精神などに障害・病をもった人々と様々な形で出会ってきた。そして、彼らの中にある欲望や生き方の多様さ・複雑さ、豊饒さを知ることによって、私はそれまでの自分の世界観や価値観が、どんなに狭く浅く、偏ったものであったのかを思い知らされてきた。

彼らの生の欲望が「普通」ではない、ということではない。むしろ、マジョリティの最大公約数としての「普通」など、この世界のどこにもありはしない。まだまだもちろん無数の社会的な差別や不公正がある、という事実を率直に認める限りで、マジョリティとしての「私たち」の欲望も「彼ら」の欲望も完全に対等であり、逆にいえば、この私の欲望もまた奇妙なもの、異形で異能なものでありうる。私たちは誰もが、市場やメディアや国家から、一般的でよく「普通」の欲求(demand)を持つべきだということを――そこでは社会秩序の面での正常／異常がつねに区別されていく――命じられている。しかし、各々の欲動(drive)の形は、それがどんなものであれ、じつは「当たり前」なのであり、しかも「当たり前」の

まさに、異形で異能でユニークなものなのだ。欲求を満たすことが快樂 (pleasure) になるとしたら、欲動を追い求めることは特異的な官能と喜び (enjoyment) をもたらす。

私がケアの仕事を通して思い知らされてきたそうした感覚は、じつは、『ジョジョ』の世界観に近いものではなかったか。

実際に、『ジョジョ』の世界では、ひとりの人間 (キャラクター) の中の強さと弱さ、長所と短所、能力と無能はつねに分割不可能なものであり、重層的に混在しうるものだ。それゆえに、単純な意味での強い／弱い、できる／できないという差別化それ自体が成り立たなくなる。強さや能力をインフレ的に競い合うことにあまり意味がなくなっていくのだ。

のみならず、『ジョジョ』の世界では、他者たちと互いの欲望を巻き込みあっていけばいくほど——それがどんなに奇妙で異形の欲望であれ——この世界は全体としてより、素晴らしくなっていくのである。友人や仲間だけではない。たまたま遭遇し、廻りあったのが狂人や変人、ダメな人間や邪悪な人間であっても、この世界はより豊かになり、より素晴らしくなっていくのだ。世界全体の強度が底上げされていくのである。

『ジョジョ』のそうした思想は、私には驚くべきもの、目から鱗が落ちるもの、福音的なものに思えた。私たちが日々味わうネガティブな感情、他者たちから触発される嫌悪や憎しみですら、この世の糧となり、喜びになりうるとすれば。身をすり減らしていく諍いや敵対の中にすら、互いの生をより素晴らしいものへと押し上げてくれる潜勢的な力が内在しているとすれば……。

障害者介助の日々を通して、私の中で、少年期以来の『ジョジョ』というマンガの読み方もまた、ほんの少しばかり——だからこそ決定的な形で——更新されたのかもしれない。読み方のギアがひとつ上がった。

＊

本論に入る前に、荒木飛呂彦氏のこれまでの経歴を確認しておく。

一九六〇年、宮城県生まれ。

一九八〇年、専門学校に在学中、「武装ポーカー」が第二〇回手塚賞に準入選。

一九八一年、同「武装ポーカー」を『ジャンプ』に掲載。

一九八三年、『魔少年ビーター』ではじめての週刊誌連載。

一九八四年、『バオー来訪者』を連載。

一九八六年、『ジョジョの奇妙な冒険』の連載をスタート。

二〇〇五年、連載中の『ジョジョ』第七部の掲載誌を『ジャンプ』から『ウルトラジャンプ』へと移動。

現在、同誌で、第八部『ジョジョリオン』(二〇二一年〜)を連載中。

荒木氏のライフワークとしての『ジョジョ』シリーズは、今年二〇一七年に、連載三〇周年を迎えた。『ジョジョ』シリーズは、各都ごとに次のように名づけられている(連載開始時のタイトル)。カッコ内は、のち

に荒木氏が各パートのタイトルを整理し直したもの。

- 第一部 ジョナサン・ジョースター——その青春 (Part 1 ファントムブラッド)
- 第二部 ジョセフ・ジョースター——その誇り高き血統 (Part 2 戦闘潮流)
- 第三部 空条承太郎——未来への遺産 (Part 3 スターダストクルセイダース)
ひがしかたしょうすけ
- 第四部 東方仗助 (Part 4 ダイヤモンドは砕けない)
- 第五部 ジョルノ・ジョバァーナ——黄金なる遺産 (Part 5 黄金の風)
- 第六部 空条徐倫——『石作りの海』 (Part 6 ストーンオーシャン)
ジョリレン
- 第七部 ステイルル・ボール・ラン
- 第八部 ジョジョリオン

『ジョジョ』シリーズの累計発行部数は、昨年段階で一億部を突破している (集英社による二〇一六年二月一六日の発表)。

これまでに一億部を突破したのは、『ジャンプ』連載のマンガとしては、『ワンピース』『ドラゴンボール』『こちら葛飾区亀有公園前派出所』『ナルト』『スラムダンク』だけであり、それらに次いで六作目の快挙になる。

荒木氏の天才的な作風・画風・ストーリーは、これまでに多くの漫画家や小説家、アーティストたちへと様々な形で影響を与えてきた。そしてその活動の場は、すでに国内のマンガの世界だけにとどまらない。海外のアートやファッションなど、ワールドワイドなものになっている。OVA、テレビアニメ、劇場映

画、ゲーム、フィギュアなど、メディアミックス的な展開も幅広く行われてきた。二〇一七年八月には実写映画が公開される。乙一、上遠野浩平、西尾維新、舞城王太郎など、国内の有名な小説家たちが『ジョジョ』をノベライズ (二次創作) してもきた。

つまり、すでに「荒木カルチャー」「ジョジョカルチャー」と呼ぶべき文化的・芸術的な水脈が——言語や国境やジャンルを超えて——世界中に広がっているのだ。

*

それにしても、マンガを読むとは、不思議なことだ。

私はこの年齢になっても、毎日のように、自宅近くや仕事先周辺のコンビニで、マンガ雑誌を立ち読みする。長年の生活習慣になっている。正月や連休で『ジャンプ』が販売されない月曜日の朝は、少しガッカリする。どんなに忙しくても、ついついコンビニに足を運んでしまう。

マンガは大量印刷される商品であり、娯楽である。日々消費され、読み流されていくものだ。それは「マンガという複製美術」(清水勲)の宿命と言える。たとえ日本のマンガ・アニメが世界中の人々に親しまれ、新しいマーケットを開拓し、アカデミックな研究の対象となり、国策としてクールジャパンと呼ばれても、マンガの宿命そのものは変わらないだろう。

しかし、日々消費されて、泡沫のように消えていく娯楽であるのみならず、マンガの中には、それ以上の何かがある。

マンガは優れたエンターテイメントであり、余計なことを考えず、素直に楽しんで読めばいい。それがいちばんだ。しかし、それだけではない。実際『ジョジョ』というマンガは、日々読み流されていく消費

的な快樂 (pleasure) だけではなく、勇氣をもつてこの世界の恐怖に立ち向かっていくという、高次元のよろこび (enjoyment) をも与えてくれるからだ。もしも私たちが『ジョジョ』のキャラクターたちの隣に寄りそって、彼らの勇氣と情熱を深く学んでいこうとするならば。

消費者としての様々な刺激に翻弄されながらも、自らの欲望を高次元の倫理的な喜びとして解き放ち、更新していくこと。この私の人生の硬度を研磨するようにして、『ジョジョ』を無心に虚心に読んでいくということ。そうしたマンガの読み方もまた、私たちには、ゆるさされているように思われる。

むしろ逆に、この世界の恐怖に向きあい、勇氣をもつて生きることは、ほんとうは楽しいこと、喜ばしいことなのかもしれない。そもそも私たちは少年少女の頃、自分の人生をマンガのキャラクターたちの人生に重ねあわせ、擦りあわせて、それを無心に、虚心に読んでいたのではなかったか。必要なのはただ、マンガを子どものように無心に、楽しく、倫理的に読んでいく、という単純で素朴なことなのではないか。今はそんな気がしている。

*

それでは。

『ジョジョ』という作品が恩寵的に与えてくれる倫理と思想を受肉し、この私の人生全体に満ちわたらせていくために。この世界を生きていくことの奇妙な驚きと喜びを、何度でも新しく学び直していくために。これから、みなさんと共に、『ジョジョ』の奇妙な冒険』の世界へと飛び込んでみたい。